

時に憩う（良寛）

擔薪下翠岑 翠岑路不平

時憩長松下 靜聞春禽聲

薪を担うて 翠岑を下る

解説 良寛ならずとも薪取りは農村の日常生活であつたが、詩情豊かな良寛はこれを詩にした。

翠岑路は 平かならず

語釈 ※担Ⅱかつぐ。背負う。※翠岑Ⅱ春の青々とした峰。※長松Ⅱ丈の高い松。※春禽Ⅱ春の鳥。鶯であろう。

時に憩う 長松の下

通釈 薪を背に春の峰を下る。目には美しいみどりの峰であるが、狭い路は、やけに凸凹している。もう少しと歩みながらも、丈高く碧空にそびえる松の下にたどり着き休む。どこからともなく鶯の声。耳を澄ましていると、あたりの静けさがひとときわ深く感ぜられる。

静かに 聞く 春禽の 声